

目加田さくを先生の業績 2

— 『花萬葉』(冬の花) から—

今、季節は冬です。だんだん寒くなってきました。万葉集の冬の花の歌にはどんなものがあるのでしょうか。前回に引き続き、『花萬葉』の目加田さくを先生の解説に導かれて見てみましょう。

『花萬葉』に収録されている歌の中で、春の花の種類は 22 種類、夏は 29 種類、秋は 15 種類です。でも、冬の花は 7 種類に留まります。やはり季節柄少ないですね。はり、やまたちばな、つた、ほよ、さなかづら(さねかづら)、たまはばき、さうけふの 7 種類ですが、名前をみただけではどんな花かわからないものもありますね。

今回はこの中から「やまたちばな」の歌を選んでみました。なお、②と③は万葉歌人として有名な大伴家持の歌で、②は天平勝宝 2 年(750 年)12 月、③は天平勝宝 8 年(756 年)11 月に詠んでいます。

なお、「やまたちばな」の場合、花ではなく、実を歌っています。

【冬の花】

やまたちばな

①あしひきの やまたちばなのいろにいでて

あれはこひなむを ひとめかたみすな

(卷第十一 二七六七)

(現代語訳)・あしひきの 山橘の 色に出でて

吾は恋いなむを やめ難くすな

(口語訳)・藪柑子(やぶこうじ)の実のように 色にあらはして

私は恋することであろうものを、

やめる事のできないものとは思ひ

なさるな

※. 山橘=藪柑子(やぶこうじ)

②このゆきの けのこるときに いぎゆかな

やまたちばなの　みのてるもみむ

(卷十九 第四二二六)

(現代語訳)・この雪の消残(けのこ)る時にいざ行かな

山橘の実のてるも見む

(口語訳)・きょう降ったこの雪がまだ消え残っている時にさあ行こう。

藪柑子(やぶこうじ)の実が赤く雪に照っているのも見よう

③けのこりの　ゆきにあへてる

あしひきの　やまたちばなを　つとにつみこな

(卷二〇 第四四七一)

(現代語訳)・消残りの　雪にあへ照る

あしひきの　山橘を　裏に摘み来な

(口語訳)・消え残る雪と照り映えあっている

あしひきの山橘をみやげに摘んでいきたい

(目加田さくを先生の解説)

(①は)消え残りの雪中に紅く照り映える藪柑子の美しさ。パッと輝いて人目につくことから、「山橘の色に出でて」と詠みました。万葉歌ならでの風情ですから、花ではありませんが収めておきます。(③について)山橘を山路のみやげに摘んでいこうとはねえ。

※①・②の現代語訳と口語訳は澤瀉久孝『万葉集注釈』中央公論社(昭和35年)

③は中西進『大伴家持6』(平成7年)角川書店を参考



(やまたちばな)